

グルの存在

スワミ・ヴァースデーヴァーナダ

1977年2月、私はマンハッタンのシッダ・ヨーガのアーシュラムに住んでセーヴァをささげていました。「シヴァの偉大な夜」であるマハーシヴァラトウリーの夜、私は瞑想ホールの中央通路の脇のハーモニウムの所に座っていました。私たちはこの祝日を祝う夜通しのチャンティング・サプタを始めようとしていて、そして私は最初の1時間の演奏をすることになっていました。

バーバ・ムクターナダ自身が、第2回世界ツアーの間の1976年8月、ニューヨーク市にこのアーシュラムを発足させました。これがこの場所での私たちの最初のマハーシヴァラトウリーのお祝いであり、ホールはこの崇拜の夜のために、可能な限りの人で埋まっていました。私たちのほとんどにとって、シヴァ神のこの神聖な夜に「オーム・ナマー・シヴァーヤ」をチャンティングする最良の体験は、バーバ自身と共にチャンティングすること——彼が先導し、私たちが応答すること——でした。そこに座って始まる瞬間を待っていると、私たちの心は切望で満ちあふれました。バーバは当時グルデーヴ・シッダ・ピートウにいて、私たちの思いはガネーシュプリーと私たちのグルへと届こうとしていました。

サプタを始める時が来たら、私は「ジョータ・セー・ジョータ・ジャガーオー」の演奏を始めます。私はこのアーラティーをよく知っていたので、演奏しながら目を閉じ、バーバのことを考えました。

するとすぐ、バーバが私の脇を通る絹衣の擦れ合う音が聞こえました。彼が身に着けていたヒーナの香油の香りがしました。彼がホールの前で席に座っているのを見ることを期待して、

私は目を開けました。しかし、もちろん、彼はそこにはいませんでした。彼はインドにいたのです。にもかかわらず、その瞬間、私はバーバが私たちと一緒にそこに「いる」と確信しました。私は1時間演奏して、それから壁際に行って床に座りました。目を閉じて、私は青い光に引き込まれ、一晩中陶然とした境地でチャンティングしながら、そこに居続けました。

明け方、私たちはサプタを終えて、アーシュラムでお祝いの朝食を楽しみました。最初の数分間、私たちは皆沈黙し、まだその夜の体験を味わっていました。しかし、チャイを少し飲んだ後、私たちはたった今体験したことについて話し始めました。

ある女性は、私たちが「ジョータ・セー・ジョータ・ジャガーオー」を歌い始めたちょうどその時、バーバがホールに大股で入って来て椅子に座るのを見たと言いました。別の人は、疑いもなくバーバが歌うのを聞いたと言いました。そして他にも多くの人々が、バーバがサプタの間に私たちといるのを感じた体験を話しました。

数週間後、私たちはグルデーヴ・シッダ・ピートゥから、そこでのマハーシヴァラトウリーのお祝いについて描写する手紙を受け取りました。バーバの実際の存在との陶酔の一晩のサプタの様子を描写した後、手紙は翌朝何が起こったかを書いていました。

それはグルデーヴ・シッダ・ピートゥの朝食後のことで、バーバはアーシュラムの中庭で講話をしようとしていました。彼が彼の家から出て来て椅子に座ると、人々は彼に少しでも近づこうと押し合い始めました。

バーバはすぐに彼が目にしたことを指摘しました。この最も神聖な夜の間ずっとマントラをチャンティングした後、どうして今、無作法にもバーバに近づこうとして、彼らが崇拝を通して得た徳を無駄にするのかと、彼は話したのです。

バーバはまた、そのように彼の近くに来るといふ錯覚を持たないように彼らに助言しました。そして彼は言いました。「今、ニューヨーク市で、彼らはちょうどサプタを始めるために座っている。そして彼ら全員が、あなたたちの誰よりも、今私に近い!」

バーバからのこれらの言葉を読んだ時、それが私たちの心に何をしたか、ちょっと想像してみてください! その神聖な夜に私たちが体験したのは真理であったこと、そしてグルとの近さに物理的な距離はほとんど意味を成さず、すべては内側のつながりであること、それは私たちへの確証だったのです。



© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。